

学年末から新学年度へ

津 守 真

クラス編成のこと——行為と作業

学年末になると、子どもたちの生活には落ち着きが出てくるが、担任の先生たちは、年度末の母親との面接、卒業、終了などのための行事があり、他方、職員会では、新学年度へ向けての準備がはじまる。学校というのは、幼稚園から大学まで、年度末は、疲労がたまる上にあわただしい。

三月のある日、数人の子どもの母親と担任との面接のために、二時間ばかり保育時間を延長して、職員会をはじめたのは、もう暗くなるころであった。その日は、新

年度のクラス編成のことを話題にすることになっていった。保育の日には、たちまち次の日へと押し出され、四月には子どもたちは新しい学年へと年を加え、新入の子どもを迎える。その態勢をととのえることは、毎日の保育を支えるために、どうしても必要なことであり、ある日限までにきめなければならない。忙しい学年末に、教師にとっては大変なことであるが、それが実質的に欠くことができないことは、だれにも共通に認識される。クラス編成とそれに伴うはなしは、教師にとっては、次の一年の自分の過ごし方をきめるから、だれもが真剣である。

それは新年度の未来のことであるけれども、現状の認

識、過去の経過を考へての上の、未来への投企であり、計画であり、実行を予想した未来像である。これからすることだから、いまの欠陥を補い、より理想に近づけたと思う。議論はおのずからに白熱する。

この養護学校の子どもの数は、この年も次の年も、合計三十六名である。専任の担任教師は八人で、男女四人ずつである。これに非常勤が数名加わる。従来、小学部を、高学年と低学年と二クラス、それに幼稚部と三クラス編成にしていた。次の年は、幼稚部から小学部一年生に上る子どもが五名あり、小学部が三十名、幼稚部が六名になる。(このほかに、幼児を主とする、週二日のグループがある。)卒業する子どもは数名で、新たに入る子どもが同数である。

担任には、今まで受持ってきた子どもを、そのままひきつづいて持ちたいとの気持もある。また、これまでの経験で、動きの少ない子どもが安心して活動できるようにするのは、保護し落ち着いた環境を作りたいという考えがある。同時に、移動と交流の自由を確保したい。

共通の理想はありながら、その実行は、あくまでも現実の諸条件に立脚してのことなので、いろいろの意見が出る。

このときから数回かけて、クラス編成と教室の整備について、次年度の方針を定めた。

大人は、話し合いによってきめたことを遂行すべく作業をはじめた。この作業は、他人と協力して目標を達成し、物の環境を作りあげる現実的行為である。この現実の基盤の上に、内なる想像の世界を含んだ保育が展開される。

クラス編成の話し合いは、このような現実の枠組に関する作業の一環であるが、それに参与する大人たちの頭の中には、ひとりひとりの子どもの内なる可能性の實現は、いかにしたら可能になるかということが考えられている。それには、想像力による飛躍をも必要とする。もしそれを欠いたならば、現実の枠組のなほは、利己的な自己主張が、観念論的理念の固執に墮してしまふ。

想像力を本質とする子どもの世界を内に含む保育の行為は、現実の基盤の上に可能になり、現実の枠組の設定には、保育の本質的課題を見直す努力を必要としている。

これから新学年度がはじまるまで、春休みの間、大人たちは、自分たちの計画した新しい環境づくりのために、木工をし、塗装をし、文字通り作業をした。

新学期の保育

四月になって子どもたちが来はじめると、前日まで作業してつくり上げた環境とクラス編成は、大人にとっては日目の保育の行われる前提となつて、保育行為の背景に退く。大人はもはや、社会的現実となつたその前提を、敢て問うことはしない。その上に、いかにして最善の保育をすることができるとかを考える。

子どもにとっては、三月までとは違うクラスに所属し、教室もかわり、戸迷うことがいろいろあるにちがいない。あらかじめよく考えたつもりでも、ある子どもは

新しい担任に親しめないかもしれない。そのことからくる緊張や、内心の混乱もあるだろう。

そのことに應答し、新たな環境の中で子どもが自己実現できるように、保育する。新学期は、保育者は、四方八方に気を配り、体を動かす。新しい環境は、保育の行為によって子どもにとって意味あるものとなる。

停滞の日と前進の日と

新学期がはじまって最初の日、小学部に進級したSくんは、幼稚園のTくんを見ると、手に持っている自動車をとったり、押したりする。これは以前からつづいていことで、どちらにも納得がいくようにするのに、久しく心を砕いてきた。この日、Sくんはホームルームの教室がかわったり、普段より緊張も強かつたのか、行動が激しかった。それまで私の傍で自動車を並べていたTくんは、私により添い、私の体からはなれなくなつてしまった。私の方に、相手をかばおうとする気持がはたらくほど、もう一方の子どもは、追いかける。昨年度、Tく

んは、大人からはなれなくなった時期があったが、私は、また同じような状態になるのではないかと恐れた。そうならないようにと、この日はほとんどそのことであるいろと試み、心を使って過した。

この新学期最初の日、昨年と同じ状況が、子どもの中にも前進の感覚なしに継続するのではないか、私共の側に、きつと何か配慮すべきことがあったのではないかと、子どもが帰ったあとを、暗く沈んだ気持であった。

まだ他にもある。今年小学部に進んだOちゃんは、帰るころに、幼稚部の部屋の前で、ふと私のところに来た。

最初、にこやかに見えたが、私とやりとりをしている間に、次第に気げんがわるくなり、遂には、地面に横になって、私の手で自分の顎を強く打ちはじめた。この場合は、私がつき合う仕方がわるかったとも思えない。自然に暗雲が蔽いひろがったようである。Oちゃんには、こういうことがしばしばあったが、この一年間に著しく良くなっていた。しかし、自分の顔を打ち叩くとき傍にいと、その時が長く感じられ、私の方も惨めな気持にな

ってしまふ。私は、こういう行動を、自傷行動と名付けて固定化することを避けたいと思う。いままでも、保育の行為によって、それが和らぎ、ほとんど消えてゆくのを数多く見ている。この日は、Oちゃんには、部屋や担任がかわったことなど、すぐには納得できないことがあるいろあったのだろう。だれかが、その気持により添って、一緒にその時を過ぎねばならない。そうすれば、きつと、環境の変化は、子どもの世界をひろげてゆく機会となるだろう。

もちろん、他の子どもたちのそれぞれを見れば、かつてなかったほど好調子の子どももいるし、大人たちのこの日の体験はいろいろである。私の接する範囲は、全体の中の一部分であるが、これらのことは、保育のあと、大人たちとの間で真剣に話された。

保育の一日は、子どもが自己実現できる日となるように、大人が助けて、つくり上げる生活である。しかし、どの一日にも、子どもが十分に活動することを妨げる要

因がある。それが、環境の変化である場合もあるし、大人の短慮、子ども同士のこと、子どもの内心の問題であることもある。その点では、どの一日もひとしい。成長を妨げる要因がはたらいっている中で、子どもの自己実現を助けるように、支え、励まし、周囲をととのえるのが保育の行為である。私はこのようなことを考えて、次の日を迎えた。

次の日、Tくんは、偶然の機会に、別のクラスの先生の背中におぶさり、別の教室で過した。私は、Tくんをかばう必要がないので、Sくんと落ち着いてつき合うことができた。Sくんは、ホームルームの隅でゲームをいじり、私がエース、ピースなどというと、Sくんもエース、ピースと云って、うけこたえてあそぶ。庭に出て、他の子の持っていた金銭登録機の玩具をとり上げて、キーを押す。私は他の物を見付けて間をとりなす。私は木の葉を、四百五十円、百三十円、などと云ってわたすと、Sくんはその数には興味を示さないが、私がい

くらと云うのをあてにしているみたいで、私との間に應答関係ができたように思えた。かなりの時間、それをつづけた。昼食のときには、大きいクラスの小学生たちが、桜の花の咲く裏庭にござをしいて食べる中にまじって、靴をぬいで坐って食べる。私は、よく人との應答答のものをつたのしむことができた。これはよく人が求めている人間的手ごたえである。

小さい子どもが通りかかると、押し倒すこともあるが、少し距離をとって見ていると、小さい子どもの方もじきに立ち直り、双方ともに、興奮することなく、次のことに向ってゆく。

他方、Tくんの方も、自分で動いて遊んでいた。きのうは、以前と同じ状況が新しい年にも持ち越されて、少しも変化がないように思え、暗い気持ちになっていたが、きょうは、きのうとは違っていた。一段と変化が見られる。Sくんは他人との應答を求め、Tくんは、自分で動くことを求めている。他の子どももまじえた生活の場で、それぞれがみたされるときには、ぶつかり合うこと

も少ない。この日は、二人は別の空間にいることが多かったので、葛藤も少ないのは当然なのだが、それぞれに十分に活動する体験を積んでゆけば、互いに相手に対する余裕ができてゆくだろう。そして、そういう日には、本人も満足だろうし、以前とは違った活動が展開される。きのうの暗さに比べて、きょうは、明るい気持ちで一日を終えた。

ある日には、子どもに成長が見られないと思って沈んだ気持ちになると、次の日には、落着きと成長が見られて明るさをとりもどすという交替現象は、ときどきくりかえして保育の日日の中にあらわれるように思う。それは単に自動的の回復ではなく、一日が過ぎて次の一日が来る間で、大人はその日をかえりみ、まじめに考える時がある。次の日、子どもに出会うときには、大人も変質している。この過程が、どのくらい意識的に行われるかは別として、一日と一日の間には、大人にも子どもにも、その日の体験が沈澱し、更生する時間が押しはさまれている。

る。そのことが、翌日、子どもに出会うときに、前日は違った作用をする。

学校にいきたがらない「パペポ」のはなし

四月のはじめは、大人にとって、不安定な緊張感がある。子どもにも、環境の変化は大きく、学校にいきたくなかったり、学校のことを考えると、気が重くなったりするだろう。学校にゆく子どもや大人をかかえている家では、春の到来にもかかわらず、家庭生活にも緊張がある。

小学校三年生のA子、二年生のP子、幼稚園年長組のY子も、それぞれに、四月の新学期を迎えた。そのころ、母親は、折にふれて、皆の生活の題材をとりいれた「パペポちゃん」の話をした。子どもたちは、その先をききたがって、母親の膝元に集まってきた。この年令の子どもたちは、自分の日常生活の体験が言語化されて語られ、それが現実には存在しない架空の名前の主人公のこととして話されることに、強い関心を示す。このこと

は、体験の言語化という作用のみでなく、それをいろいろの角度から見直して、考えを深めることへの一歩ともいえよう。

この日、母親は、「パペポ」が学校にいかない話をした。皆の心の中に、学校生活の不安定さがあることを察したからだと思う。校長先生にお母さんが手紙をもっていくことになった。

学校にいくと、どんないいことがあるかと、「パペポ」がきく。そうすると、A子、P子、Y子みんなが、大声を出して、先を争って云う。

いろんなことをおぼえられる
給食がたべられる

友だちができる

体育の時間がおもしろい

.....などなど

どれも肯定的な答えになっているが、どのひとつにも、子どもなりの悩みがある。

ある子どもは、給食を食べたくないのに、きまった時

間内に全部たべなくてはならないことが苦痛である。

「きょうは真中くらいだった」と家に帰るなり報告する。「もうひとりのあたしが、たべたくないっていうと、もうひとりのあたしが、たべなさいってつねるの、そうやってたべるの」と云う。食べることは子どもにとって楽しみなはずなのに、給食になると、食物の質のみでなく、管理されて同じものを食べることに、抵抗があるのではないか。学校では平気で食べているようにみえても、家に帰ると内心のことが口に出る。

ある子どもは、新学期になってから、家に帰ると、ベッドでうずくまって、同じような本をくりかえし読み、活気のない生活がずつとつづいている。そんなことが、親にも重苦しく反映して、あせりとなる。ところが、そう思って親が気を配ると、次の日には、子どもはぼっと明るくあそぶ。

ある日には、子どもは家に帰ってきたら、玄関で涙が出てきた。「日直がいやなの」と云う。仕事そのものがいやなのではなくて、近所の友だちと遊ぶ約束の時間に

間にあわないというところらしい。学校の規則は、子どもに大きな力をもっている。

ある子どもは云う。「あーあ、Yちゃんが、大きくなったら、学校にいくの気の毒になっちゃった。でもそういうのは、いいわけできないよ。すぐいいわけする人もいるんだから」。学校にいくということは、子どもにとって動かしがたいことで子どもが口で抗議しても、何の効力もないということを云いたいらしい。

「バベポ」のお母さんであるバベリーナの奥さんは、校長先生に手紙を出して、こんな学校なら子どもが好きだというような学校を作ってもらうように頼む。折返し、校長先生から手紙がきて、どんな学校がいいか相談したいという。子どもたちはまた、わいわいとしやべりはじめ。

これは、私の家での十五年前の会話である。子どもたちはそれぞれに、新学年の環境の変化に対して、学校の中で苦勞していることがわかる。多かれ少なかれ、ほと

んどの子どもが、この時期には、類似の状況にあるのではなからうか。

大人もまた、新学年のはじめには、新たな生活態勢の中で、緊張が大きい。それだけに、新しい生活の流れに、自分をも子どもをも早く順応させようというあせりが大人の視点を前面に出させてしまう。この年令の子どもが、家庭で身近にいなくなると、子どもにとってあたりまえのことが見えなくなる。

四月には、学校や幼稚園では、とくに、大人は、子どもの視点と大人の視点と、複眼をもつことが必要なことを、私はいま学校の立場に身をおいて、痛感させられている。

(愛育養護学校)

